山口裕子

JOSHIBI no.171

いろんな人と出会い、
いろんな考え方に触れよう。

ファンの声に耳を澄ます。いろんな人に会って刺激を受ける。ひとりよがりのものは作らない。ハローキティを世界的なキャラクターへと育てあげた山口裕子さんが、長年に渡り大切にしてきたことだ。そんな創作哲学の背景にあるものに迫る。

Photo 井上佐由紀　Text 立古和智

30年間ずっとキティを担当しているので、いつも周囲からは「アイデアが尽きることはありませんか?」と聞かれます。たしかに机の前で悶々とやっていたら、すぐに煮詰まりそうですが、私の場合、いろんな人と会って話をするなかでアイデアを得ていますので「産みの苦しみ」とはあまり縁がありません。苦しんだのはキティの三代目デザイナーになった直後の5年間くらい。当時はどうすればキティが売れるのか見当もつきませんでした。そこで、その状況を打破するためにとった行動も、実は人と会うことだったのです。具体的には新人歌手が店頭でサイン会を催すのと同じように、私も店頭で色紙にキティを描いて配り、キティに対する印象を尋ねて回りました。このとき幸運だったのは、自分はキティの産みの親ではなかったこと。だから、どれだけ辛辣なコメントをいただいても平気で聞き入れることができたのです。キティは、ここでの声を元に、市場の反応を見ながら改善されていきました。

そもそも、デザイナーは自分が手がけたものに愛情をかけ過ぎては、いけません。キャラクターはデザイナーではなくファンのものですから。私もキティとは30年の付き合いですが、私のパートナーではあっても、決して私を癒してくれる存在ではありません。意外かもしれませんが、もう少し冷めた目で、客観的にとらえています。実際、私が仕事で大事にしているのも、ひとりよがりなものを作らないことです。いろんな人に会って、いろんな考え方に触れることは、「ひとりよがり」を回避するのにも有効だと思います。

私の場合、会う人の年齢は10代から80代までさまざまです。職業だって医者、弁護士、IT関係、写真家、モデル、俳優、編集者、金融関係、料理研究家、ファッションデザイナー、スポーツ選手、実業家、といろいろですが、みなさん私の脳を活性化してくれる人ばかり。それに、日頃から自分より若い人と付き合っていれば、年齢を重ねていってもセンスを鈍らせる心配はなくなります。

会いたい相手には、周囲に頼らず自ら電話を手にして、思いをぶつけます。もちろん前ぶれもなく「ファンです」と迫れば驚かせることになりますが、少しずつ共通の話題ができて、そのうち食事に行くようになって、と徐々に距離は縮まっていくものです。いろんな人と話をするには、幅広い知識が必要ですから、会話の中で知ったことは自分でもよく勉強します。相手が俳優さんだったら、出演作を片っ端から入手してチェックしたりもしますね。

なんだかんだ言っても、私はいろんなものに感化され、刺激され、影響を受けやすいタイプの人間なのでしょう。だからこそ、いろんな人と話をするうちに世の中に何が必要なのかを感じ取ってしまう。それに私はみんなが好きなものが好き。デザイナーやアーティストにありがちな、極めてユニークなものを率先して手にする方ではありません。普段身につけているものは、みんなが受け入れる類のものばかり。そういったものの集合体として、私の個性は形づくられているのです。

キティの先のことは、私にもまったく読めません。これまで同様、世の中の流れに沿って発展していくものですからね。とはいえ進化していくことは宿命でしょう。巷のキャラクターには、シビアな使用規定にしばられ、変化に乏しい保守的なものもありますが、そんなに過保護にしなくてもいいはず。キティの場合、そうはしなかったから大きな進化を遂げることができ、結果、広く愛されてきました。私だって同じことの繰り返しは退屈です。飽きることなくこの仕事を楽しんでこれたのは、キティには自由があったからです。

つまるところ、キティは私自身が吸収したものを映し出していける白いキャンバスなわけです。私の成長イコール、キティの進化。そういったことはキャラクターデザインに限らず、きっと何に取り組んでいても同じでしょう。私はいつもそんな風に感じています。

山口裕子

高知県高知市生まれ。女子美術大学卒業後、株式会社サンリオ入社。1980年より現在までハローキティの三代目デザイナー。キティに様々な変化を与えていくことで、世界109カ国で年間5万種類の商品に展開される人気キャラクターへと育てあげたほか、キティのボーイフレンド「ディア・ダニエル」やキティのペット「チャーミーキティ」を生み出す。サンリオショップでファンの人たちと直接交流する「サイン会」の開催回数は海外を含め1000回以上。近年は国内外のデザイナー、アーティストとのコラボレーションにも積極的に参加。

女子美力で笑顔をふやしたい！プレゼンコンテスト開催

被災地支援関係のボランティア活動が起ち上げられる中、アートが持つ力を信じ、女子美生の持つ力を結集するきっかけづくりとなる新しいプレゼンコンテストが行われました。コンテストの概要と最優秀賞を受賞したチームを紹介します。

『日本に笑顔を！』。今回、この言葉を課題テーマとした新たなプレゼンコンテスト『女子美プレゼンコンテスト』が開催されました。これは、女子美生の「企画力とプレゼンテーション力の向上」を目指す就業力GPの一環として今年度より実施したものです。アートの力で、また女子美生ならではのアイデアで日本を明るく元気にする企画を募集。全応募22チームから予備選考を通過した8チームが10月15日に行われた最終審査に臨みました。本学横山勝樹学長の他、アートディレクターやアーティストなどのゲスト審査員の方々に加え、観客が審査する公開プレゼン形式で実施された最終審査では、衣装やかぶり物、ファッションショーやダンスを駆使した本学らしい趣向を凝らしたプレゼンが繰り広げられ、審査員のみならず会場中を驚かせていました。甲乙つけがたいプレゼン発表の結果、最優秀賞を獲得したのはほめる(＝お互いが笑顔になれるコミュニケーション)活動の推進を提案した『ほめ活 HOMEKATSU』。優秀賞を受賞した『笑水引 PROJECT』と審査員賞を受賞した『記憶の森に出かけよう！』のチームとともにステージに上り、祝福の拍手を受けました。

震災後、高まりつつある「世の中のために何かしたい」という意識。そんな今だからこそ社会に対して高い関心を持ってほしい…そのような期待からスタートしたこのコンテスト。始まったばかりの小さな試みですが、やがては社会に何かを発信できる大きなイベントになればと願っています。

最優秀賞受賞の『ほめ活 HOMEKATSU』チームのメンバー。ほめ活ポーズをキメるのは、左より洋画専攻2年 下田佳奈さん、VDコース3年 木下奈津子さん、日本画専攻3年 藤川卓子さん、ヴィジュアルデザイン専攻2年 中村杏惟さんの4人です。学内のリーダーズキャンプで知り合った仲間と「また、楽しいことがしたい！」との藤川さんからの呼び掛けに応じたことから『ほめ活』プロジェクトが始動。おそろいのTシャツを前に「いろんなグッズも作ったし…」「ほめ体操も考えたよね」とコンテストを振り返る4人。「大勢の人に何かを伝える方法を考えるのは大変でした。でもとことん楽しめました！」藤川さんの言葉に、みな笑顔で頷きました。

10月15日の最終審査は、本学学長の他、中嶋貴久氏(株式会社電通・アートディレクター)、堤 岳彦氏(グラフィックデザイナー)・流 麻二果氏(アーティスト)・柴谷麻以氏(株式会社電通・アートディレクター)・竹林直美氏(REBIRTH PROJECT)・関根優作氏(REBIRTH PROJECT)等のゲスト審査員が見守る中、開催。112名22チームから32本の企画が応募され、各受賞チームには賞金が授与された。

アニメーションだからこそ、できることがある

「バッタの理髪店」

国立新美術館にて開催されたICAFに本学メディアアート学科から出品されたアニメーション作品の数々。CG作品が多いなか、本学出品作品はパペットやセットを作りこみ、コマ撮り手法へのこだわりが感じられると高評価。そのこだわりについていろいろお聞きしました。

「何も言わなくても気持ちが伝わるところがアニメーションのすごいところかと」。ICAF出品者の松本春日さんは、そう話します。本学から出品された12本のほとんどが台詞のない作品。カタツムリ、ゴキブリやドングリといった個性的な面々が登場する作品もありますが、何を感じ何を想っているかはよくわかります。どうしてこのキャラクターなの?「…ずっとずっと好きだから」。好きなものをよく知りたくて、調べる。知らなかったことがわかる。知識が増えると、ますます好きになってもっと調べたくなる…その繰り返しで今にたどりついた、と話す伊藤理紗子さん。『害虫会議』の作者である伊藤さんは「好きなものを突き詰めていって、そこでわかったことを誰かに伝えたくてだからこの作品を作ったようなものです」と笑います。

「ただかわいいだけじゃ、つまらないですよ!」と話すのは小菅美郷さん。彼女の出品作品『Donguri』では、かわいいキャラクター代表のリスが悪の権化に。「最初は"作品としてのおもしろさ"の意味が全然わからなくて。でもちょっと見方を変えたら"おもしろい"ことのおもしろさがわかったんです」。

一方、主人公の内気な猫の少年に自分自身を重ねた作品『バッタの理髪店』を作った小崎緑さんは「この作品を通して、自分自身を客観的に見ることができたと思います」と話してくれました。伊藤さん、小菅さん、小崎さんの作品はICAF出品がきっかけで、11月放送の『デジスタ・ティーンズ』(NHK教育テレビ)

「害虫会議」

「Donguri」

左より 吉岡渚生さん、渡邉由紀さん、小菅美郷さん、松本春日さん

伊藤理紗子さん

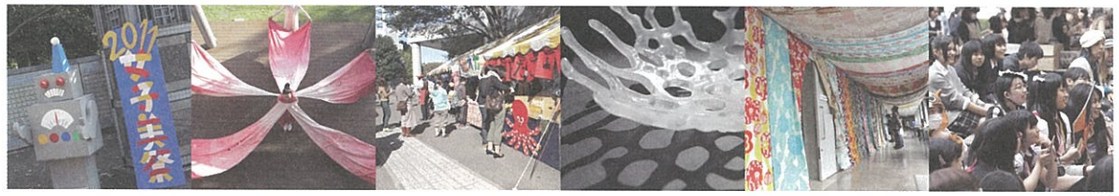
小崎緑さん

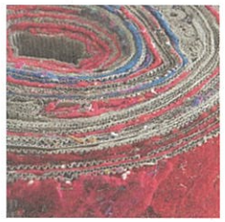
でも紹介されました。

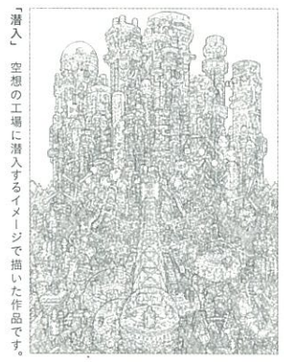
同じきっかけでコロンビア共和国で開催されるアニメーションフェスティバルに『Present for you』という作品が招待された渡邉由紀さん、吉岡渚生さんのふたりも笑顔で話します。「自分たちの手で作りあげた大好きな世界観を、海外の方にもわかってもらえたことは自信になります!」。

10月には本学にて第5回目を迎える公募展『こどもアニメーションフェスティバル』も開催。アニメーション作品の持つ可能性を探る活動に期待が集まっています。これからどんな作品を作りたい?出品者のひとりが笑顔で答えてくれました。「記憶のすみっこにひっかかって、いつかふっと思い出してもらえるような作品です」。

ICAF
Inter College Animation Festival。アニメーションを専門的に学ぶことのできる教育機関が推薦する学生作品を一堂に集めた、学生のための本格的なアニメーションフェスティバル。第9回目が2011年9〜11月に開催された。







「潜入」空想の工場に潜入するイメージで描いた作品です。

10月28日〜30日、女子美祭が開催されました。たくさんの作品展示とともに、杉並キャンパスでは伊勢谷友介氏と亀石太夏匡氏の対談、相模原キャンパスではおおたうに氏、梅佳代氏、ムトウユージ氏の講演会などが行われ、盛況のうちに幕を下ろしました。相模原キャンパス女子美祭実行委員会主催のアートコンペでは、洋画専攻4年山本佳奈さんの「潜入」(写真左)がグランプリに輝きました。

女子美祭 2011

100周年記念大村文子基金

創立100周年記念事業の一環として、「100周年記念大村文子基金」は、平成11年に大村智理事長夫妻からの寄付を基に、文子令夫人のお名前をいただいて設立されました。この基金によって運営されている4つの賞、そして本基金の目的のために功績のあった者、および団体に贈られる「大村特別賞」が以下の方たちに授与されました。

平成24年度 第13回

女子美パリ賞

[パリ国際芸術都市のアトリエ利用権]
[副賞100万円]

井上織衣

平成18年3月 芸術学部ファッション造形学科卒業/平成20年3月 美術研究科修士課程デザイン専攻ファッション造形研究領域修了

「Russia Trip」
紙粘土、雑誌の切り抜き / 2010年

平成24年度 第6回

女子美ミラノ賞

[ミラノの本学借り上げマンション貸与]
[副賞100万円]

宮園夕加

平成20年3月
芸術学部ファッション造形学科卒業

「牡丹釦」
30mm / 白蝶貝 / 2010年

平成23年度 第11回 **女子美制作・研究奨励賞** [副賞各20万円]

石川華代

平成9年3月
芸術学部デザイン科卒業

「てのり湯。」(インスタレーションおよびパフォーマンス)
Mixed media(銀、石膏、桐、竹他) / 2011年

石塚沙矢香

平成16年3月
芸術学部絵画科洋画専攻卒業

photo Takenori Miyamoto+Hiromi Seno
越後妻有アートトリエンナーレ2009
「うかのめ」
お米、糸、空き家に残っていた器や古道具など/2009年

大小島真木

平成21年3月 芸術学部絵画学科洋画専攻卒業/平成23年3月 美術研究科修士課程美術専攻洋画研究領域修了

「銀のしずく
ふるふるまわりに、
金のしずく
ふるふるまわりに」

鉛筆、色鉛筆、アクリル、アルシュ紙 / 2011年

平井幸恵

平成18年3月短期大学部造形学科卒業/平成20年3月 芸術学部ファッション造形学科卒業

「Öland」
330mm×330mm
羊毛(ゴットランドシープ)、羊毛糸、綿糸 / 2010年

平成23年度 第10回 **女子美美術奨励賞**(留学生対象) [副賞各10万円]

イ ユンジ

国籍 韓国/美術研究科修士課程デザイン専攻メディアアート造形研究領域 2年次在籍

「Listen to my words - I」

金 成河(キム ソンハ)

国籍 韓国
芸術学部ファッション造形学科3年次在籍

「青いバラ」綿、絵の具

平成23年度 **大村特別賞** [記念品]

**「女子美染織コレクション
ー江戸 KIMONOアート展覧会企画運営プロジェクト」**

展覧会名「江戸KIMONOアート展」
会期:平成23年3月3日〜11月30日
(京都・大阪・日本橋・横浜・女子美アートミュージアム開催)

「たんねのあかり実行委員会」

イベント名「たんねのあかり2011」
日時:平成23年10月8日(新潟県柏崎市谷根開催)

グランプリを受賞した
ヴィジュアルデザインコース3年 龍春奈さん

仲條先生のコメント：
パッケージがレトロな印象でなかなか良い味をしているなと思います。ちょうど今彼女のセンスと僕が良いなと思うセンスが同じで、とってもいいと思います。ふるさとを感じるデザインだね。

受賞者のコメント：
受賞を聞いた時は、本当に驚きました。この受賞は、いろんな偶然の重なりとも思えるので、それを確かなものにすべく、再度作り直します。この機会に参加できたことを嬉しく思います。ありがとうございました。

仲條正義客員教授 特別講義

10月22日、相模原キャンパスにてデザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻客員教授である仲條正義先生の特別授業が行われ、デザイン・工芸学科の学生25名と聴講の学生が参加しました。

課題は『ある街の高級洋菓子パッケージ』。実在する街にある架空の高級洋菓子店を想定して、ショップロゴマークやパッケージ、手提げ袋をデザインし「その街でしか手に入らない特別感のある商品とすること」という条件があげられました。

課題内容に対し、ご自身が手がけられた銀座・資生堂パーラー本店の商品パッケージ展開を例に出し「最近はビスケットなど缶に入っているものが多いけど、紙の箱にしたいと提案をして制作をしました。苦労しましたけど新しく体験したこともあります。みなさんにも苦労をしてもらおうと思って今回の課題にしました」というコメントをいただきました。

講義当日は仲條先生から作品一点ずつに講評をいただき、デザイナーの仕事について言及されました。

「買う人のニーズに、気持ちにあわせること。驚きを大切にすること。変えてはいけないものもあるのだけど、見たら興奮するようなものをつくってほしい。琴線に触れるもの、見た瞬間に飛びかかってくるようなものを見つけるのがデザインの大切なところ。あなた方は新しい時代を背負って商品を売らなくてはならないのだから」。

講評終了後、仲條先生にグランプリ作品と入選作品を選んでいただきました。講義に参加した学生は終始先生のお話に聞き入り、熱心にメモを取りながら質問をするなど熱い授業となりました。

仲條正義
1933年東京生まれ。'56年東京藝術大学美術学部図案科卒業。資生堂宣伝部、デスカを経て'61年仲條デザイン事務所設立。主な仕事に、資生堂企業文化誌『花椿』、東京都現代美術館、松屋銀座のロゴマーク、資生堂パーラー銀座本店ショップのパッケージデザインなど。

マーラ・セルベット客員教授 コラボレーション授業を実施

英語によるプレゼンテーションを実践的に学ぶ授業『英語プレゼンテーション』内で、プロダクトデザイナーであり建築家であるマーラ・セルベット客員教授のコラボレーション授業が行われました。

「一方的な授業形態ではなく、よりお互いのコミュニケーションができる形式に…」というセルベット教授からの提案を受けて、佐藤和子客員教授も同席する中、授業はワークショップ形式で行われました。学生はいくつかのグループに分かれ、9月23日と30日、テーマ『THE NEW LUXURY IN PUBLIC SPACE』に基づき、既存の場所をより豊かな場所へ再生するアイデアを考察し、英語でプレゼンテーションを行いました。

北地那奈さんとチャイ イーシェンさん（ともに環境デザイン専攻2年）は「時には思い通りに表現できないこともあったが、イタリア人であるセルベット先生と英語を使ってコミュニケーションをとり、作品について1対1で意見交換をすることで自分の世界が一気に広がった」と、感想を語りました。また、世界の第一線で活躍するセルベット教授の授業に対し「先生の豊富な知識と経験に触れることができ刺激になった。普段の授業とは異なる視点からのアドバイスは新鮮だった」と、話しました。

「多くのものを見なさい。美術館にあるものだけが美術作品ではない。街中にある色々なものを見ることが自分の心と目を育てる」。授業の最後、セルベット教授から寄せられたコメントに多くの学生が感銘を受けました。

Mara Servetto（マーラ・セルベット）
1990年 ミリオーレ・セルベット共同建築事務所開設。2006年 トリノ冬季オリンピック総合設計コンパッソ・ドーロ受賞。2008年 ワルシャワのショパン・ミュージアム国際コンペ最優秀賞。2011年 イタリア共和国誕生150周年記念モニュメント制作者に、イタリア政府より指名される。

NEWS & TOPICS

01 クリエイターズBOX「目に見えないものを表現したい」小谷元彦氏、語る

キャリア支援センター主催、クリエイターズ BOX13 が 10 月 19 日に相模原キャンパスで開催されました。講演者は、彫刻家として活躍中の小谷元彦さんでした。
講演テーマは自身の作品コンセプト「ファントム」という概念について。哲学的な内容をわかりやすく説明され「目には見えないものを表現したい」との話に学生もひきこまれていました。また、彫刻の可能性について「彫刻とは“効果”をつくるものに近い」と話す小谷さん。仏像などを例に出し、作品が与える効果について徹底的に分析する姿勢が印象的で「自分の作品も周到な仕掛けをつくり、鑑賞者がそれを手がかりにひもといていくように見せたい」と語っていました。
「ものの見方を養うことと、アイデアを形にしていく訓練が大事。自分の中で完結させず、人に話してどんどん膨らませるといいトレーニングになります」とアドバイス。第一線で活躍する小谷さんからのメッセージに「制作に向かう勇気をもらった」と話す学生が数多くいました。

02 高山村プロジェクト アートとデザインで地域づくり

長野県高山村で、女子美生が地元の小学生も交えてバス停のペイントを行いました。バス停に描いたイラストは「バスを待つ動物たち」というタイトルで、高山村に生息する動物達がなかよくバスを待っているところです。女子美、須高ケーブルテレビ、高山村産学官連携事業の 6 周年記念として、高山村に宿泊した女子美同窓生への女子美ワイン、りんごソースプレゼントキャンペーンも実施中です。

03 日本画家 堀文子氏に名誉博士号を授与

昭和15(1940)年に本学を卒業された日本画家 堀文子氏に名誉博士号が授与されました。堀氏は本学在学中に新美術人協会に出品し、入選。以来長きにわたり創作活動を続けています。伝統的な大和絵の描法で、自然や花鳥を主題に詩情のきわみとも言うべき感性をうたい続け「花の画家」とも呼ばれています。その活動が次世代に大きな影響を与えたことを評価し、今回の授与に至りました。

04 桃井かおり客員教授 リガ市の名誉文化大使に

桃井かおり客員教授が8月18日、ラトビア共和国の首都リガ市の名誉文化大使に任命されました。桃井教授は昨年ラトビアのマリス・マーチンソン監督の映画『AMAYA』に出演し、香港に暮らす日本人を熱演。同作品はアカデミー賞外国語映画賞のラトビア代表にも選ばれました。桃井教授はラトビアと日本との文化の発展に貢献したと評価され外国人で初めて名誉文化大使に任命されました。

05 日本フィルハーモニーと被災地支援のコラボレーション

メディアアート学科の学生による被災地こども支援アートアクティビティ OMODOC チームの活動拠点は津波被害の激しかった石巻市の旧北上川河畔八幡町にあります。
6 月から何度も通い、ニーズにあったプロジェクトを実現させてきました。今回は日本フィルハーモニーの「被災地に音楽を」訪問演奏とヒーリングアートをコラボレーションさせ被災された方々と心温まる時間を共有しました。

06 アートの新たな可能性を探る 美術教育フォーラム開催

8月3日、本学と世田谷美術館との共同開催にて、小学校・中学校・高等学校の美術科教員、大学教員、美術科教員志望者、美術館関係者を対象に第12回美術教育フォーラム「障害／アート／教育ー視点を変えてアートをみるー」が行われました。165名が聴講する中、アートによる障害者支援についての講演会、パネルディスカッションが行われ、美術教育の新たな可能性について考える場となりました。

09 大学院生が高校生に商品企画・製造・販売を指導

ファッション造形 修士1年の大島さん、熊崎さんがS.I.C(さがみはら産業創造センター)の依頼により、地域の高校生を対象とした「商品企画から製造・販売」の体験講座を担当。企業の方や他大学の学生とともに指導を行いました。受講者に商品がお客様の手元に届くまでの流れを経験させることができ、ともに喜びを分かち合えたことは大きな収穫となりました。

08 済美日曜教室『創作講座』を実施

この教室は知的障害のある方達の仲間づくりの場として杉並区立社会教育センターが主催し、年16回済美養護学校で開催しています。11月13日、本学学生10名、教員4名が『創作講座』を担当。紙の上に横たわりシルエットを切り抜く「からだでアート」と「版画・スチレン版画で絵はがき作り」を行いました。参加者は意欲的に取り組み、素敵な作品ができ上がりました。

07 丹後ちりめんと女子美生、産学協同

10月22日、本学と丹後ファッションウィーク開催委員会が織物業振興および人材育成に関する連携協定を締結。今後、丹後ちりめんをはじめとした丹後の織物を使った雑貨類の製品開発等に本学学生が協力して取り組むことが確認されました。学生が商品化を前提としたプロジェクトに携わることで実践的な製品の企画・デザイン力を身につける機会となることが期待されます。

12 OMODOCの活動がJ-COMで配信中

「わたしたちも何かできるはず」という想いから始まったメディアアート学科18名の学生によるボランティアチーム『OMODOC』の活動がケーブルテレビの取材を受け、現在配信中です。東日本大震災の被災地復興支援活動として、手作りグッズ販売の他、子どもを支援するワークショップ等を実施。活動の詳細はhttp://omodoc.kenkenpa.net/まで。

11 美大生が手がけた「人権ポスター」都庁で展示

「女子美×電通　人権アートプロジェクトin 杉並キャンパス」(指導:伊勢克也教授)が実施されました。これは電通社内募集で生まれた人権スローガンに、女子美生がヴィジュアルルデザインを考え「人権ポスター」を作るもので、今年で5年目を迎えます。都庁において「人権フォーラムin 2011」が開催され、第一本庁舎南展望室に本学学生優秀作品が展示されました。

10 被災地で子どもたちと版画制作

斎藤研名誉教授の出身地である福島県新地町で、8月22日に子どもと保護者を対象にした「夏休み版画教室」を実施。今回のこの教室は、20年近く「版画の会」を開催している縁のある新地町で、大地震と津波で大きな被害を受けた子どもたちを励まそうと短大版画研究室が中心となり企画したものです。扱いが簡単なスチレン版画を制作し、楽しいひと時を過ごしました。

14 相模原公園「夏休みこども大会」参加協力

神奈川県立公園プロジェクト((公財)神奈川県公園協会×メディアアート学科)に3、4年生有志が参加、8月7日に相模原公園で行われた「夏休みこども大会」「食虫植物展」に協力しました。公園全体をテーマパークに見立て、宝探しやワークショップ等を実施、楽しいイメージを演出しました。

(川村貞知　アート・デザイン表現学科メディア表現領域准教授)

13 北里大学病院工事エリアにアートストリート

北里大学病院からの依頼により新病院建設工事エリアの全長336mの仮囲いに、本学がアート空間の演出を手がけました。近年の修了制作作品・卒業制作作品の中から選出した91点の作品画像をデータフィルム化し、仮囲いに加工しました。医学と芸術のふれあいを楽しめる期間は約2年間です。

16 相模原キャンパス創立者像 建立

創立110周年記念事業の締めくくりとして、相模原校舎に創立者である横井玉子先生像と佐藤志津先生像を立体アート専攻津田裕子教授の制作により建立いたしました。その完成に合わせ、11月24日に多くの学生が参列する中、除幕式を挙行、創立者の偉業を顕彰し、建学の精神を改めて分かち合う賑やかな式典となりました。

15 創設125周年の横浜水道案内板をデザイン

明治20年、日本初の近代水道として道志川水源から横浜野毛山取水場へと続く約44Km区間を通る「横浜水道」。相模原キャンパス正門前の「水道みち」にはこの水道が埋まっています。記念案内板のデザインをメディアアート学科4年 牛島侑美さん、平井美季さん、山田佳奈さんの3名が担当しました。

19 公募展等受賞者紹介

国際瀧冨士美術賞第32期奨学生　室井麻未　絵画学科洋画専攻4年

第57回一陽展
奨励賞　小野知香　立体アート学科4年
入選　渡部友美絵　立体アート学科3年

第47回神奈川県美術展
大賞
＜平面立体部門＞古井彩夏　大学院修士課程立体芸術研究領域1年
＜工芸部門＞荒　姿寿　大学院修士課程工芸研究領域(染)2年
入選＜平面立体部門＞
塩崎　遥　大学院修士課程立体芸術研究領域2年
荒木美由　大学院修士課程立体芸術研究領域1年
加藤広子　大学院修士課程立体芸術研究領域1年
土橋　葵　大学院修士課程立体芸術研究領域1年
齋藤美沙　立体アート学科3年

第96回二科展
入選
＜彫刻部門＞小野多衣子　大学院修士課程立体芸術研究領域2年
＜写真学生部門＞櫻井ひかる　短期大学部造形学科創造デザインコース2年

第11回アート・ミーツ・アーキテクチャー・コンペティション(AAC)
優秀賞
帆足枝里子　大学院修士課程立体芸術研究領域1年

第58回宮崎県都城市美術展
北諸県郡歯科医師会長賞
鶴山美彩紀　大学院修士課程立体芸術研究領域2年

17 平成23年度 学内卒業・修了制作展　お知らせ

大学芸術学部	相模原キャンパス 3月11日(日)～14日(水)　10:00～16:00
短期大学部	杉並キャンパス 3月11日(日)～13日(火)　10:00～16:00
大学院	相模原キャンパス　女子美アートミュージアム 3月12日(月)～20日(火・祝)　10:00～17:00 (入館は16:30まで)

18 女子美スタイル2011 ー再生の光をつむいで

日時:2月10日(金)～13日(月)　11:30～19:00
(最終日は15:00まで／入館は全日終了の30分前まで)
会場:BankART Studio NYK(横浜市中区海岸通3－9)
大学・短大・大学院、全ての卒業・修了制作作品の中から選出された作品を展示する展覧会です。

JAM 展覧会報告①

11/9(水) → 11/30(水)

女子美染織コレクション展 Part I
EDO KIMONO ART

今や『KIMONO』としてグローバルな存在になりつつある着物。本展覧会では過去から現代、そして未来へとつながる着物の魅力と可能性を着物や帯の他、絵画や現代アート作品を展観しました。また従来のケース展示に加え、「額装展示」を導入。この展示方法により来館された方々にはデザイン構成から細部の染織技法に至るまでKIMONOの魅力を堪能していただけたことと思います。

幅広い世代の方々に着物と親しんでいただくため実施した数々の教育プログラム。中でもレプリカ着物(高精細画をもとに着物の裁断図を作成、布にプリントアウトし和裁仕立てした着物)を着装体験するワークショップは、参加者の方々より大変好評でした。

クラシックでありながらも大胆かつ斬新な魅力あふれるKIMONO。今回の展覧会では先端的展示や、講演会等を通して新たな魅力を体感していただけたのではないでしょうか。今後も教育研究資源のユニークな活用と教育普及に積極的に取り組んでいきます。

平成23年度　退職教員記念展

9/16(金) → 10/23(日)

定年退職する実技系教員(大澤美樹子、恩田美千代、小山欽也、嶋澤道雄、長谷川好男、安田律子)による展示を行い、在学生をはじめ多くの方にご覧いただきました。幅広い分野の表現が共鳴し合い、見応えのある展覧会になりました。

造形さがみ風っ子展

10/27(木) → 10/31(月)

毎年恒例の相模原市教育委員会主催による小中学生の作品展。今年は女子美祭と同じ時期に開催されたこともあり、例年より多くの方にご来場いただきました。

JAM 展覧会予告

12/9(金) → 2/5(日)　※12/27～1/10休館

input → output
溝田コレクション×光島貴之

溝田コトヱ名誉教授より寄贈されたコレクションを初公開。視覚にハンディのある作家・光島貴之と女子美生が対話を通してコレクションを鑑賞。鑑賞の映像や、鑑賞のイメージをもとに制作した作品も展示します。

3/11(日) → 3/20(火・祝)

平成23年度
女子美術大学大学院修了制作作品展

平成23年度に大学院美術研究科を修了する学生の修了制作を約50点展示します。

銀座 gallery 女子美　展覧会報告

ホワイとギャラリー：
white gallery, not why and gallery
平成23年7/4(月)→ 7/30(土)
芸術表象専攻企画による無審査公募展示。参加作家：82名

第2回「新しい眼」梶浦奈緒子展
平成23年8/1(月)→ 8/6(土)
女子美を卒業・修了した期待の新人作家を紹介する企画『新しい眼』第2回。大学院日本画領域修了 梶浦奈緒子による日本画展。

第3回「新しい眼」金藤みなみ展
平成23年8/22(月)→ 8/27(土)
洋画専攻卒業の金藤みなみによる個展。デジタルプリント等の展示とパフォーマンスを実施。

第4回「新しい眼」國盛麻衣佳「be with underground」
平成23年8/29(月)→ 9/3(土)
洋画専攻卒業の國盛麻衣佳による個展。コールペイント等の展示、ワークショップ、ギャラリートークを実施。

土方朋子×市川裕司
平成23年9/5(月)→ 9/17(土)
女子美非常勤講師・創画会会友の土方朋子と多摩美術大学日本画卒業の市川裕司による日本画展。

込戸かんな・池田巳奈展
平成23年9/19(月・祝)→10/1(土)
洋画専攻研究室助手・込戸かんなと大学院洋画領域修了の池田巳奈による2人展。木彫、油絵を展示。

菅野静香・池田香央里
「わたしたちの世界、透明で密やかな香りに充ちて。」
平成23年10/3(月)→10/15(土)
洋画専攻研究室助手の菅野静香と洋画専攻卒業の池田香央里による油絵展。

天野純治×鎌谷伸一「版表現―シルクスクリーン」
平成23年10/17(月)→10/29(土)
非常勤講師の天野純治と2009年まで非常勤講師を勤めた故・鎌谷伸一による2人展。ドローイング、シルクスクリーンを展示。

小林基輝 展「Revive M*L―制本の世界―」
平成23年10/31(月)→11/12(土)
非常勤講師・美術修復家の小林基輝による個展。銅版画、ブックワーク、ドローイング等を展示。

東谷武美×元田久治「版表現-リトグラフ」
平成23年11/14(月)→11/26(土)
非常勤講師の元田久治と元短期大学部非常勤講師、東京藝術大学教授の東谷武美によるリトグラフ展。

北澤憲明＋足立元 企画
「作品は、ここにあった。―現代アートの考古学」
平成23年12/1(木)→12/17(土)
芸術表象専攻教授の北澤憲明と非常勤講師の足立元による企画。洋画卒業の飯山由貴の作品(残片)と、美術評論家・美術史家による諸記録で構成された展覧会。

飯山由貴「installation plan」
平成23年12/19(月)→12/24(土)
芸術表象専攻研究室助手・沼下桂子による企画展。前展覧会にて残片として公開された飯山由貴のインスタレーションの再現と関連資料を展示。

女子美術大学広報誌

発　　行　学校法人女子美術大学
〒166-8538
東京都杉並区和田1-49-8
企画・編集　総務企画部広報課
監　　修　山本吉男・林規章
企画・デザイン　株式会社 Kitchen Sink.
制作・印刷　株式會社 日相印刷
発 行 日　2012年1月6日

広報課では女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせください。また、本誌の定期購読をご希望の方はお送り先を広報課までご連絡ください。

広報課
TEL 042-778-6123
E-mail prs@venus.joshibi.jp
URL http://www.joshibi.ac.jp